

人の血を吸ふ鬼のやうな奴さへ自然に身も心も新なる正月、加之も目出たき一年中の
 人事開始といふ二日の朝、八軒長屋の名物男たる熊さんが不意に警察へ引き行かれし
 となれば、伸し餅の手前なくとも騒がずには居れぬ一蓮托生、わけて女房お菊は猶更
 ら狂氣の如し、

何事も先登第一に狼狽へ廻る朝鮮髻、あつと驚いて飛び出せしが、また忽ち駈け戻つ
 て天地四方を拜しながら、俄に筮竹を取出し算木を置き並べつゝ、眼を閉ぢて吉凶判
 断の眞ツ最中、此奴も慌てし千三屋の石作と鑛糞の西川、顔色を變へて飛び込めば、
 あたら神易、めちやく〜となりぬ、

「やツ、こりやア酷い、せゝ折角こゝまで出た卦を」

「馬鹿々々しい、そんな平凡八卦で事が済むかね、兎も角も誰か警察へ往つて、様子

を聞き出して來るのが近道だ、それにやア朝鮮さん、いくらか仔細らしくつて君に
 限るよ、さア早く」

「眞實だ、こゝで氣を揉んだつて仕方がないよ、早く往つて貰ひたい、今も細君が行
 くと騒ぎ出すから無理に止めて來たんだ、さア早く頼むぜ、何だね竹ッ屑や拍子木
 の切れツ端は後で片付けてやるよ、さア早く」

「なるほど、こいつア拙者の神易よりも早道らしいな」

「知れたこつた、二錢や三錢で出る卦が何になるもんか」

「や、道理だ、心得た、人も人によりけりだ、あの熊さんが警察へ、そゝそんな馬鹿
 な事が、案じるに及ばない、この幸運齋、一言の下に連れて歸るから」

「文句は後で聞くよ、早く出たツ」

朝鮮髻、そのまゝ飛び出せしかと思へば、また取つて返して、きよろ〜見廻す體、

「おい／＼何だよ、どうしたんだい」
「いや、帽子を忘れたよ、苟くも警察なんかへ出る時は威儀を正さないと人體に關はるからな」

「ちよツ、困るなア、そら、その壁に懸ツてるぢやアないか」

「おツと、これでよし、もう大丈夫だ、安心して待ツてるが宜い」

明治七八年ごろ我國へ輸入せし古色蒼然、夜なく淺草へ戴いて出る黒の山高帽子を面深に被りつゝ、怪しげなる例の道行を着流し、齒の缺けたる日和下駄の音高く、ひよこ／＼と小走りに驅け行く後姿、甚だ不安心ながら、せめて彼奴の叱られ工合で本人の様子を探らんと待ち受けぬ、
まして女房お菊は長屋の入口に立ちながら、今か／＼と待ち受けし朝鮮髻よりも本人まづ歸り來りし姿を見るや否、やもはず驅け出して半泣きの聲、

「良人さん、良人さん、どうしたんですよウ」

悄然たる熊公、差俯きし面をあけて兩眼の溜め涙、ほろ／＼と振り落しぬ、

「トンでもねエ事になつたよ、先生が首を吊つて、し、死んで仕舞つたんだ、その遺書の中に乃公の名が、あつたからさ、南無、南無阿彌陀佛」

正月三日、都下の新聞紙上いづれも三面の一段以上を埋めしは、例の星影先生が首吊り一件なり、

そのうち最も愛讀者の多き一新聞の記事を轉載すれば、左の如し、

◎戀愛詩人のゴランコ往生

蝦茶式部に深き恨の遺書

舊臘三十一日の夜一時前に淺草町の木賃宿へ辻傳に乗りて投宿せし一人の男(前後)
 宿帳に山口謙次郎と誌し三日分の宿料を前拂にして此社會の所謂別間と稱する二
 疊の一室へ入りしが越えて二日の黎明その兵兒帶を鴨居に懸けて無慙の縊死を遂け
 たりと以上これのみにては更に何の事もなければ、抑も此縊死者の死因に就いては
 大に憐むべきことありて今日世間の青年男女が頂門の一針ともなるべき一の懺悔
 文を遣せり加之も鉛筆にて二枚の改良半紙へ書き流せる筆跡といひ文章といひ聊か
 見るに足るのみか我一社員の記憶に依れば星影といふ雅號は曾て或文學雜誌へ折々
 新體詩を寄せしものなりと兎も角も左に掲ぐる死者の一文に依つて其人物の奈何と
 事の茲に至れる真相を窺ひ知るべし、

我は自然の死の手に導かれて花の梢を辭するが如く逝くものにあらず、我は不自
 然の死の穴に誘はれて脊を打たるゝが如く陥るものなり、加之も資性の頑迷にし

て素養の淺劣なる、いかに先哲の死に臨んで物に煩はされざる高潔の裳を捉へん
 とすれど悲しい哉、我は事の茲に到れるを以て悉く自己の罪のみに歸する能はず、
 今や最後の間一髪その刹那にも眼前に現はれ來りて我に纏ひ我を促しつゝ嘲り笑
 へる一個の悪魔あるを奈何せん、あゝ我は我死を安からしめんがため日々夜々こ
 の悪魔を忘れんとせしが、この残忍なる悪魔は竟に去らずして明白に我を縊れり、
 悪魔の性は瀬田、名は豊子、年は二十一、歌妓娼婦の類に屬して世の所謂醜業
 婦なるものにあらず、常に清き戀の神聖を説き圓なる愛の理想を希ひ最も高尚優
 美なる品性を養ひ來りしといふ女學生の一人なり、我また當時は常に天空の高き
 を仰ぎ海底の深きを羨んで其間の地上の於ける人事一切を唾棄せし一個の詩人な
 り、この幽玄なる詩人と、かの優美なる淑女と、互に相逢うて得たるところは果
 して何物ぞ、憐れむべし我は竟に彼がために縊れ殺されたり、

無用の空想に迷うて現在の人間を解し得ざりし我は、一個の詩人たるよりも寧ろ一種の精神病者たりしなり、されど我は過れる其詩を以て人を欺かず世を偽らず、たゞ詩人として詩人たるの資格なかりしのみ、これに反して彼が神聖の戀と愛は何ぞ圖らん、世に卑しめられて淫を賣る醜業婦よりも更に幾層倍の卑しき手段に用ひられし一時の假裝物たり、加之も我をして死に至らしめたる彼の巧妙は知名の小説家が意匠慘澹に作り出せる毒婦よりも遙に勝りて残忍を極めたり、嗚呼、我は醜業婦のために殺されざりしを恨む、また惡漢無頼の迫害に刺されざりしを憾む、さらに盜賊の兇刃に斃れ得ざりしを怨む、

山口星影誌

死に致されたる怨恨の一念より多少の我田引水に屬すべき點もあれど一讀凄慘の氣人に迫れり文中の瀨田豐子なるもの果して今いづこに在る我社は最も機敏なる例の

方法に依つて遠からず此瀨田豐子を紙上に見えしむべし、また別に此縊死者が本所業平町の裏長屋に住める車夫に對して感謝せる一通の書置を存せりとの噂あり、

あはれ久しく八軒長屋に神韻縹緲たりし星影先生も、この新聞紙上を見れば一片の新體詩さへ呻り得ず、たゞ行方も知れぬ例の廂髪に愚痴を滾して、身を立つべき三十の曉、ぶらりと下りて死に果てぬ、

星影先生が瀨田とよ子に對せし怨恨の一文を遺せし外、また別に熊公へ感謝せし俗用文の一通ありしがため、警察へ呼び出されて本人生前の委細を問はれし時、熊さん兩眼の涙を握り拳に叩きながら、八軒長屋にありし當時の事より厩橋の闇に出逢ひし事まで具さに答へし後、旦那この敵を取つて下せエ、あの阿魔め、あの阿魔ツちよを旦那

那、ふん縛ッて下せエと大聲あけて泣き出せし體に、警官いづれも思はず動かされてこゝに瀬田とよ子は最も厳しく其影を追はるべき注意人物となりぬ、加之も熊公、他に引取人なき星影先生の死骸を乞うて、ほろ車の膝掛に用ひし古毛布に包み、十文字に脊負うて八軒長屋へ歸り來るや否、その死骸を自己が塙へ安置し、三錢の香華を手向け、二錢の駄菓子を供物に供へ、あけて四十二の大男が小兒の如く泣きながら念佛を唱へぬ、

さて斯うなれば長屋中また捨て、置かれぬ大騒動、相も變らず朝鮮髯が第一に飛び廻つて、千三屋も鑛糞も馴染のない色狂者まで義理人情、お虎婆さへ今更ら殊勝氣に戸口より差覗いて掌を合しぬ、

「おい嗅ア、いくら悔ンでも仕方がねエから、兎も角も佛の始末だ、せめて棺桶だけの工面よ、なアに警察の旦那に乃公ア願ッて來たからな、龜井戸の火葬場へ持つて

行きやア、養育院並に無價で濟む筈になッてるさ、しかし野邊送りだけでも何とか差荷ひにしる納める棺に納めて行きてエよ」

「眞實だねエ良人さん、お可哀さうに死んでまで、這入る棺のないやうにしやアがツたんだよ、あの畜生め、どこに居るんだらう、妾、口惜しくツて、くゝ口惜しくツてさア」

「待ッてる、乃公が怨念だけでも、ろくでやツて堪るもんけエ、だが差當ッて嗅ア、どうしよう」

「どうしようツて、良人さん、おゝさうだ、あるよ良人さん、あるよ」

「何、ある、どうするんだ」

「すツかり忘れて居たよ、そら、あの、神田の本屋さんがさ」

「や、なるほど、こいつア氣か付かなかつた、大晦日の夜、いろく居酒屋で懺悔談

話のあつた時、あの本屋へも二度と再び顔が出せねエと聞いたが、かうなりやア出すも出さねエもあるもんか、よし、すぐ乃公が出かけよう、しかし、たゞ神田の本屋ぢやア無効だ、何とか言つたツけな、さア困つたぞ、たしか文、文の字が冒頭にあつたよ、なアに先生の名を言つて片ツ端から神田中の本屋を聞いて歩かア」

「だつて良人さん、今こゝに出ちやア、こんな時こそ幸ひ、あの千三屋か、八卦屋でも頼んだ方が」

「いけねエ、あの朝鮮髻、口ばかりで何の益にも立たねエ奴だ、昨日だつて長屋中の名代で、一言の下に連れて歸るとか何とか大層な事を言つて來たンぢやアねエか、それに唐變木め、あの怪しい姿で、うろくくと警察の門前ばかり往つたり來たりしてるからね不意に呼び込まれてさ、青くなつてる奴を乃公が言譯してやつたくれエだ」

浅草町の木賃宿より古毛布に包まれて十文字に脊負ひ込まれし星影先生の死骸、また其まゝ龜井戸の火葬場へ十文字に脊負ひ出さるゝかと思ひの外、新しき棺桶に納めて櫛の葉を蔽ひ、やうく豆ランプ一個の筈が俄に三挺の蠟燭を點し聯ね、さのみ臭からぬ線香の煙を立て、熊公夫婦が施主となりつゝ、朝鮮髻と石作と鑛糞の西川三人、今夜の通夜を勤めぬ、

「さア、これで佛も浮ぶだらうよ、實ア棺桶の工面に盡きてね、神田の本屋とまでやア氣は着いたが儲その本屋の名を忘れて仕舞つてよ、嗚アと夫婦で途方に暮れて居たんだ、ところへ不思議ぢやアねエか、その本屋の手代が新聞に驚いて、不意に五圓といふ香奠を持って來たから、兎に角まづ斯う出來たのさ」

「いや、たとひ死骸を納める棺が無くツても、生きて居る時から一方ならん熊さんの

親切なもの、通じないですか、きつと佛は喜んでるよ、ね、これが無縁の他人で出来る世話かね、この幸運齋の如きは、只それへ一包の寸志を備へたばかりが關の山だ」

「おい、朝鮮さん、さういはれると困るよ、この石作は充分およぶだけしたいといふ志があつても、生憎、何一個、備へる力が無いんだね」

「熊さん、この西川は片棒を荷ぐよ、それで佛への申譯だ」

「なアに斯う出来て仕舞やア、別に誰も彼もねエよ、今夜かうして通夜をしてくれりやア佛の満足さ、時に八卦家、汝の一包は何だい、どうも開けずに置いてくれといふから其ま、開けもしねエが、まさか金ぢやア無からう」

「無論、金でないから猶更、そのま、開けずに置いて貰ひたい、たゞ拙者の寸志、佛にさへ届けば宜いんだ」

「そりやア、さうだがね、折角の志を施主に立ッた乃公が知らねエも變だ、第一このま、ぢやア始末に困るから汝の面前で開けるよ」

「や、熊さん待ッた、今こゝで開けられちやア少々」

「なぜ、何故だ」

「何故でも聊か、佛へ對して失禮に當るからね」

「妙な事をいふぢやアねエか、佛へ備へたものが佛へ失禮に當るたア、それも他の手前、金だと言やア随分お察しの宜い熊さんだ、黙ッて此まゝの寸志だけに止めても置くがね、がさくと何だか這入ッてるやうだぜ」

石作と西川の二人が朝鮮髻を遮る間に熊公その一包を取ッて開けば、ばらくと膝に滾れし麩麵粉の屑、加之も一合ばかり、錢にして三厘か五厘なり、

「な、何だい、こりやア、寸志によりけりだ、人を馬鹿にするない、え、おい、いく

「此佛が召上ツたからツて、ありやア時と場合で仕方がねエからだ、わざ／＼お好
 きで召上ツたんぢやアねエぞ、汝が苦駄張ツた死骸へ筮竹や算木の削りツ屑を備へ
 て浮べるけエ、この八卦よい屋め」

石作と西川の二人、こゝぞと左右より首を振り立てながらの苦笑ひ、

「なるほど、流石ア違ツたもんだな、どうしても我々より一枚の上手だよ、いかにも
 手輕の御寸志で結構だ、は、は、は、あれで濟めば我々も佛の召上ツた焼芋の蓆を備へ
 るんだツたねエ、惜しい事をしたよ」

何事も第一番に罷り出でて第一番に凹垂れる朝鮮髻、ぐうの音もなく片隅へ身を縮め
 て小聲に念佛を唱へ始めぬ、

なるほど寸志といへば寸志、加之も生前に召上ツた事はあれど、麵麩粉の屑とは八卦

よい屋め、あまり人を馬鹿にせしのみか第一この佛に對して濟まざる申譯のため、小
 肥りの西川と脛達者の石作が交代の役目に俄に振付けられ、業平町より龜井戸の火葬
 場まで熊公と差荷ひの片棒を荷がされし朝鮮髻、へと／＼に弱り果て、勞る、足を引
 摺りながら、やう／＼自己が堪へ這ふが如く歸り來りぬ、
 かくと待ち受けし熊公が壁越の聲、

「今かね、何をして居たんだい、遅いぢやアねエか、乃公なんかア二時間も前に歸ッ
 たぜ、しかし御苦勞だツたよ、それでこそ佛も満足だ」

「佛は御満足だらうが、生きた人間一疋の半死だよ熊さん、この様子ぢやア今夜、淺
 草へも出られないさ」

「正月早々、さう出なくツても宜いぢやアねエか、まだ今日は四日だぜ」

「いや、その四日が大切だ、三日の間は千里同風の例外だが、俵いよ／＼四日からが

一年中の運氣始めだ、考へて見ると高い香奠に當るよ」
向側より首を突き出す千三屋の石作、

「や、今お歸りかね、麩麩粉の屑が妙に祟つて、とんだ氣の毒だったよ、ひよろく變な腰付で、蟻螂が小芋を荷ぎ上げたといふ工合、よほど危かつたぜ、實ア見兼ねたがね、折角あゝして佛のために荷いで行くものを、不意に此方へ譲つて貫つちやア濟まないと思つてさ」

「おい／＼石作さん、戯談ぢやアないよ、半泣きの一所懸命で、もし捨てられるもんなら放り投げて遁け出すところだ、それほど氣の毒と思やア何故、遠慮なしに途中で代つてくれないんだ、この幸運齋は生れて以來、肩に物を乗つけた事のない人間だからな、みり／＼と首の脇が痛んで、腰の骨も脚の筋も違つたやうだ、當分まづ御病人の體だぜ」

筋向ふの西川また首を突き出しぬ、

「なアに安心するが宜いさ、すぐと癒るよ、もしそれが病源になつて萬一の事がありやア、その時こそ我々二人で神妙に荷ぎ出すからね」

朝鮮髻、いち／＼出損うて今更ら喰ひ付く相手もなく、あはれ其まゝの無言に凹みしが、ます／＼肩と腰との痛みに澁面を作りながら、腹立まぎれの身を横へし折しも、表障子の破れ目より鄰屋の花野露雄、そつと差覗きぬ、

「嗚お疲れでせう」

「でせう、とは俳優さん拙者への挨拶かね、勞れたか疲れなにか葬式に立たなくつても今の談話で分りさうなものだ」

「は／＼／＼や、さう取られちやア困りますよ、實は少々、御相談かた／＼お願ひがあるんですから」

「まッ平だ、御免を蒙らう、例の心中沙汰で澤山だよ」

「こりやア酷い、決して、あんな馬鹿な事は二度と再び、は、は、早い談話が失禮ながら、こゝに二十錢といふ見料を持参したんですがね、ちよいと卦を立て、戴く事は出来すまいか」

朝鮮髯、むくりと起き直りぬ、

「まア兎も角も這入りなさい、そもく卦は天地自然の示すところで、つまり人間に愛憎好悪のない神易の表現だ、よろしい、それならば篤と謹んで御相談に與からう」例の心中沙汰に手盛の一杯を喰はされし以來、この色狂者めと睨み付けて、ろくに物も言はざる奴なれど、思はぬ不意に二十錢の見料と聞くや否、むくりと起き直りし朝鮮髯、肩の疼痛も腰の疲勞も忘れ果て、俄に算木筮竹を取出しながら、急に容姿を改めつ、仔細らしけの咳一咳、

「生涯の運氣か今年中の吉凶判断か但しは差當つての一事一物に就いてか、いづれに致せ、天地の選に體し神明の徳に通ずとあるからは、たとひ壁一重に鄰り合つて朝夕かう心易く顔を見合つて居ても卦の上には一點の私心もないから、かりにも怪疑を挿んでは不可ないよ、そもく易は廣大悉備、自然に合する宇宙の理で、古を去る遠しと雖も遺經尙存すと言つて、則ち聖人の講じ遺された道だ、加之も時に隨ひ變易して以て道に従ふとは、つまり汝さんが喜怒哀樂に依つて生ずる顔貌を其ま、明鏡にうつすが如く、どうしても争へない身の運勢が自ら卦の象に現はる、理由で、これ固より凡人の爲す業でなしぢや、よろしいかな」

何が宜しいやら、いふ奴も聞く奴も一切さらに分らねど、分つた面をして饒舌れば、また分つた面して首肯く花野露雄、いかにも朝鮮髯に占はる、奴なり、

「なるほど、は、ア、さういふモンですかね、ところが生涯の運氣も今年の吉凶も暫

く置いて、如何でせう、差當つて今この胸に思つてゐる事は」

「まづ悪くもないやうだな、大した事もなからう」

「やつても善いんですか」

「さて善くもないさ、しかし悪くもないさ、兎も角もこのところは乾坤の中に迷つてゐる卦だよ」

「困りますな、その中に迷つてゐるから、占つて貰ひたいんですよ」

「いや、さうだらう、さうあるべき筈だよ、そこで幸運齋これに神易にかけて見ると、お待ちなさいよ、はて、これだから、かうなる、これを翻して、その裏は斯うだから、やはり表は斯うだ、則ち震下坎下、坎下艮上、また離下乾上、む、段々として来るわい、さて巽下巽上、兌下兌上、さア出たぞ、出たぞ、さア分つた、いよく分つた」

めちやくくに算木を置き替へて、宵闇に盜賊を追ひ詰めしが如く、さア出た、分つた分つたと騒ぎ立つれば、いよく煙に巻かれし花野露雄、おもはず小膝を進めて獅子鼻の下より例の反ツ齒を剥き出しぬ、

「どう出ました、どういふ工合に分りましたね」

「安心なさい、頗る宜いね、占易の表は大極上々吉、よし裏に翻つたところで、凶と雖も居れば吉より順へば害せずとある、よほど頼もしいね、近來これは稀に出る卦だよ、今その胸に思つてゐる通り行つて更に少しの差支もない、所謂轉ンでも空手は起きずちや、は、は、は、時に近處合壁の交際は交際、この二十錢は一點の私心もない神易に供へるよ」

今その胸に思ふ通り行つて更に何の支障もなし大極上々吉といへど、實は何を思つて居るやら朝鮮髻さらに分らず、たゞ花野露雄が自己一人が胸に思つて、自己一人が頗

る安心の體なり、

占ひし奴が何事も時の勝負に八卦よい屋の朝鮮髻、占はれし奴が本人これでも俳優の心得を以て罷り在る花野露雄、今この胸に思ッてる事と問へば、その胸に思ッてる事いかにも大極上々と答へて、一方は平氣で澄まし込み一方は俄に安堵の體、盲目が闇の夜の雲を掴み合ふよりも猶更ら面白き取組なり、その翌日の夕暮、壁越に念を押出す花野露雄が聲、

「きのふの朝、占ッて貰ッた通り、いよく今夜、やりませ、この胸に思ッてる事を」

朝鮮髻、わざと重々しき體、

「神易の示すところだよ、疑はずに思ッた通り、やりなさい」

「大丈夫でせうな」

「よろしい、受合ッたよ」

「有難い、さア占めたぞ、無論、やるにしても萬々、仕損じはありますまいな、も一度あらためて安心を仕直したいんですから、氣の濟むやうに何とか言ッて下さいな」

「出来るとも、すぐ出来るよ、この事に就いては自然の運氣、汝さんに向ッて來てるからね、たゞ汝さんの覺悟次第だ、つまり手を開くと握るとにあるやうなものだよ、握れば出来る、開けば去るといふ理窟でね、兎も角も一旦、握ッたら放さないが宜い、しツかり握ッて仕舞へば思ッてる事が必ず成就する、放しちやア無効だよ、いけないよ」

「や、ふしぎだね、なるほど争はれないもんだ、餅屋は餅屋、その道になると恐ろしいやうだ、これと打明けて言はなくツても、思ッた事に自然と合ッて來て、言葉の調子にまで現はれますね」

「そこが神易だよ、開いては折角の運が遁けるぜ、たゞ一所懸命に握るべしだ、そもそも此運といふものは天地の間に絶えず飛び歩いて、彼奴に取ッ付かうか、此奴に喰ひ付かうかと、實は先の方で迷ッてる位だから、此方は只こゝぞといふ時を覘ッて握れば宜いんだ」

「ますく、有難い、實ア先の方から迷ッて來てるんですね、たゞ此方は握れば宜いんですね、さうとは知らずに馬鹿々々しい、さんざ氣を揉んで、つまらない餘計な苦勞をしましたよ、は、は、は、」

「しかし、それが時節到來だ、いくら苦勞して氣を揉んでも、先が來なくツちやアいけないさ、ところが今の汝さんには、たしかに來てるらしい」

「なるほど、さう聞いて見ると、さうかと思ひ當る事がありますよ」

「あるだらう、自然に通じて來た一つの證據だ、何となく氣が勇んで、心が嬉しくッ

て堪るまい」

「堪るも堪らないも、そろ／＼氣が變になつて來ましたよ、しツかり御禮をしますぜ、二十錢は安い、こりやア安いもんだ、いづれ握ッた上、あらためて見料を差上げませう」

「もはや既に我知らず、ゆツたりと心の大きくなつた其調子が即ち、猶更出來る瑞相だよ、は、は、は、」

朝鮮髻、いよく資本不要の神易を振りかけて出來る／＼といへば、花野露雄、ますます白癡の骨頂に上り詰めて自己一人が何をか呑み込みし恐悅面、そのまゝ座にも得堪へず飛び跳ねて跳り廻りぬ、

「さアかうしては居られないぞ」

日本橋の濱町二丁目に格子づくりの二階家、さのみ目立たねど、こゝかと思れば、なるほど、さうかと思はる、船板塀に小庭の青葉を圍うて表札は眞白の陶器に漆墨の女名前ながら、その實は宮城野萩之助といふ名を兎も角も新聞の劇評に外されぬ新俳優の隠れ家なり、

表札の本人は年ごろ二十六七、いはずとも知れし身の果、色は淺黒けれど垢ぬけし目鼻立くつきりと冴えて、どこやらに一癖きかぬ氣の凄味を含みし風情、結び髪のみ、荒き大島の常着に黒縹子の帯ゆるく、籠行燈の灯影に長煙管の煙を吹きながら、片手を箱火鉢の角に頬杖の下目遣ひ、その前に例の反ッ齒を剃き出して今更の追従輕薄は花野露雄、あはれ此奴も男の端なり、

「もう何時でせう、先生は一時間も前に、劇場を出られたンですよ」

「なアに歸るか歸らないか、當になる人ぢやアないのさ、また途中から風の工合で、

どツか妙な方角へでも散ツて仕舞つたらうよ、ほゝゝゝ」

「困りますなア、かういふ事を申しちやア何ですが、全體、貴女が、あまり萬事に捌け過ぎるのが却ツて毒ですよ、やはり先生の爲ですから、お嫌でも少しは世間體の野暮になツて取締ツて下さらないぢやア」

「あら、花野さん、をかしく變に荷ぎ上げてても無効よ」

「いや、眞實ですよ、第一また先生も先生だ、いくら貴女が手放し過ぎるからツて、あ、好い氣になツて泳ぎ出しちやア濟まないさ、實ア貴女のために現在、あれだけの地位になれた人ですからね、無論、花野露雄は先生に付くべき筈の人間ですよ、しかし先生の足許に付いて、これから一所懸命に修行もして見たいといふ人間だから猶更ら先生のため、貴女に御心配をかけたくないンですよ」

「おや、まア御親切だ事、だがね花野さん、どうせ堅氣の男を持つてるンぢやアなし

いちく、目に角立て、さうも言へないさ、馬鹿に甘くなつてゐる理由でもないが、また外で騒ぎ女のないやうな人ぢやア、妾の氣には入らないの、ちと不足ですよ、ほゝゝゝ」

「なるほど、さう聞けば、さうかも知れませんな、しかし此頃の新橋は少々、油断がなりませんぜ」

「新橋でも止橋でも宜いちやアありませんか、そんな事を妾にいふよりも花野さん、自分の藝に身を入れてね、何でも早く一役を付けられるやうにならないと無効ですよ、あの人だつて、いつまで部屋にばかり使はうといふ氣は無いですからね、また妾だつて蔭ながら口を添へてあげますさ、ね、まだ年は若し、顔の道具も地で見るとより舞臺の方が、きつと能くなる性質だから、人は何と言つても關はず自分自身で勉強なさい、きけば近頃、どツかへ出て仕舞つて劇場の方にも寝泊りしないと

いふぢやアありませんか、それがいけないさ、たとひ辛くつても今のうちは辛抱が第一ですよ、やはり場を遠退いちやア損ですよ、をりく絶えず此家へも來てさ、不在でも妾が居れば、また時折は着替の不自由をせずに済む事がありますよ、ね、實は他の人達が汝さんばかりを妙な工合で、何だか除外物のやうにするのが妾、氣の毒で堪らないんですよ」

「いや、有難う御坐います、以後、その決心で、やりますから、どうか何分、よろしく願ひますが、これでも地顔より舞臺の方が好くなりませうか」

「なるともさ、大體さう悪いんぢやアないもの、修行次第で段々と貫目が添つて來てつくり工合さへ巧妙けりやア、うちの先生より却つて舞臺晴のする面相だよ、だから氣を落さずに充分、やつて御覽、うかくすると妾だつて無事は置かないよ、その時こそ今の世話を恩に押掛けてさ、ほゝゝゝ」

「こりやア酷い、戯談にも程度のおつたもんだ、は、は、は、何だか馬鹿にされてるやうで」

「何、馬鹿にするもンかね、俳優さへ上れば自然に其他の萬事も上ツて来るもんだよ、しかし、さうなれば幾何この妾が騒いだツて見向もしないんだらうね、さんざ苦勞さした過去の事を忘れて仕舞ツて、よくも今更ら平氣に浮氣が出来るよ、だから男は憎らしいのさ、え、ツツ自烈ツたい」

實は今まで心の底に忍びし我男の事、おもはず口に出て癩癩の遣場なき眼前に幸ひ花野露雄が膝頭、ぎゆうと捻れば此奴また朝鮮髯に例の神易を振りかけられし白癡の骨頂、あはれや前後無差別こゝぞと其手を握るや否、さらぬも元來きかぬ氣の女、長煙管の雁首に真正面の出額、ほかりと喰はされて、きやツと叫びぬ

「痛いッ」

「おや、生きてるの」

朝鮮髯の神易、握れば出来る筈のところ、真正面の出額に長煙管の雁首、ほかりと喰うて其まゝ引据ゑられし花野露雄、加之も癩癩の青筋を立てし女の前に平蜘蛛の如くなりて、うかくすれば二度目の雁首また飛んで來さうな形勢不穩、頗る危険なり、
「何だツて妾の手を握ツたんだね、どういふ當り年の心算か知らないが、ふざけた事をする南瓜野郎だよ此奴は、づうくしいにも程度のおつたもんだ、さア何故この妾を甘く舐めたか、何故この妾に變な眞似をしかけたか、それを立派に言ツて見るが宜い」

「いえ何、け、決して、さういふ不埒な料簡では、しかし何とも申譯の御坐いませんこツて」

「あら、ふしぎだね、それでも申譯のないことを知ツてるの」

「へエ、存じて居りますが、つい、うかと致しました次第で、どうか今夜の事だけは此場かぎりに」

「いけないよ、存じて居られて猶更ら誰が承知するもんか、うかとする事も事に依りけりだ、かりにも師匠の女房が弟子も弟子、澁ッ柿の帯にもなれない奴に小いやらしい、手首を握られてさ、啞だつて黙ッちやア居ないよ、第一また汝のやうな御念の入った薄馬鹿はね、かういふ時に物の制裁を付けて置かないと、いけ太く餘所へ往つて何を、どんな事を言ひ觸らさないにも限らないから、今夜の事は此まゝの無事に済まされぬよ、とても見込は無いが、かはいさうだと思へばこそ、かうせエの、あゝせエのと心易く親切に言つて遣りやア、ほゝゝ、呆れの宙返りを二三度うツても足らない奴だよ、すぐと好い氣になつてさ、よくまア其面で大膽に、あんな眞似が出来たもんだ、少しは恥といふ事を知らないぢやア馬鹿は馬鹿ながらも人の

哀れ氣が無くなるよ、いくら付け上るにしても自分の身とね、眼前の相手を考へた上のこつたよ」

「へエ恐れ入ります」

「へエ恐れ入りますも無いもんだ、そら、その背後に姿見の鏡があるからね、ちよいと振り返つて見直すが宜い、地顔より舞臺晴がすると言つたのは一所懸命の修行次第で、もし三枚目の端ツくれにでもなれるだらうかと氣に張を付けてやつたんだ、大體その不器用で、その御面相で、俳優になりたいといふのが間違つてるよ、小色の一人も持つて見たいと思やアね、汝のやうな男は大道のヨカ／＼飴屋にでもなつてさ、まぐれ當りに浮氣ッほい子守か山の奥の亭主に死に別れた乳母さんか、それも最初からア無効だよ、根氣よく働いて五六年も馴染になつて、出雲の神様の油断を見澄ました上、お情に預れば生涯の大出来だ、その覺悟も無くツて生意氣に、うか

うか世間の女へ妙な真似をすると罰が當るよ、ろくで行かないよ、わかッたか」
 「御道理な事で」

「ほ、ほ、段々と考へりやア、自分でも道理だと氣が着くだらう」
 「以後は、きツと心得ますから、今夜だけのところは」

「お心得、他のこツちやアない自分のためだよ、さア一圓こ、へ膏藥代を出すからね、
 外の人達が歸らない前に早く出るが宜い、ほんとに一時は、誰か呼びに遣ッて、小
 ツ酷い目に逢はさうかと思ツたんだよ、みりくと癩癩に觸ッて腹が立ッてさ」

片手に額の底を押へ片手に一圓紙幣を戴きつ、すごくと歸り行く男一疋、これで
 此奴が出来もせぬ色氣ありとは猶更以て面白し、

宵より淺草の山門脇へ例の神易を荷ぎ出せし朝鮮髻、はや十二時に近き頃、やうく

歸り來りて、ごそくと蟹の如く自己が穴へ這ひ込みつ、そのまゝの黒闇に丸寝の
 身を横へしが、をりしも壁一重を隔て、漏る、吐息に、さてはと思はず鎌首を擡けぬ、
 「や、隣屋の色男いつの間にか歸ッてるんだな、どうです、神易の示すところ果し
 て違はず、大極上々吉、うまく握れましたらう、何も二十錢の外を催促する理由ぢ
 やアないが、だんまりの猫糞は聊か酷いね」

「握る事は握りましたよ」

「さうともさ、握れないで何うする、確に疑ひもなく卦の象に現れたんだもの、あれ
 で、握れなきやア幸運齋この占易を明日から廢めて仕舞ッても宜いくらるだ、は、
 は、しかし先づ以て結構だ、どんな工合に握れましたね」

「握る事は握ッても、その握り工合が面白くないから、かう溜息を吐いて夜の目も寢
 られず鬱ぎ込んでるんですよ」

「何、面白くない、はてね、握る事は握ったが面白くないとは、ふしぎだね、さういふ筈はない、どうしても理の當然、さうあるべき筈のもんぢやアない」

「さういふ筈がなくなつても現在、かういふ、なさけない始末になつたんですよ、面白くないにも、段々あるが、いやはや、この面白く無さ加減と言つたら、お談話にもならない結果で」

「ますく、變だ、あまりに物が間違ひ過ぎて呵しいよ、こりやア察するところ、汝さんの握り工合が悪かつたんだらう、そもく、神易の」

「さ、其、その神易だ、實に驚いた神易ですぜ、その神易を安心して守つたから斯んな痛い目に逢つたんだ」

「なアに、さうでない、こゝぞと思ふ坪を覗つて、しつかり握れば、何事によらず、きつと出来る筈だ、もし出来ないとして見れば、これ即ち汝さんの握りやうが足ら

ないんだ、自然の運勢、實は先から來てるんだもの、惜しい事をしたよ、開けば去るといふのは此處だ、残念ながら當分の間、ちよいと不可ないね、まづ暫く置いて其うちに再度、あらためて出直すんだ」

「ど、何うして、なかく先から來て居ませんぞ、當分も暫時も、うかく出直せるもんですか、生涯もう無効だ、まだ握つたか握らないうちに、ほかりと不意の唐突ですもの、それも手加減をして生優しく出る事か、邪慳に眞正面から癩癩まぎれの長い奴でね、おまけに意地わるく新調の故か、雁首の小太い皿の大きい薄張と來たから堪らない、ぐらく、目が眩んで一時、氣が遠くなりましたよ」

「や、全體、そりやア何のこつたね、どうも談話の様子が變だ」

「あんな目に逢つちやア、誰だつて様子が變になりまさアね、兎も角も夜が明けたら見て貰ひたい、とんだ神易の效驗を蒙つたもんだ、二十四の今日まで満足に來た男

の生面へ長煙管の極印さ、どう考へても一圓の膏藥代ぢやア差引の勘定が合はない、

だばめき	隠雪總	竈
八軒長屋		
六十六 茶屋	六十三 三軒五郎 三軒の茶屋	六十四 三軒の茶屋
六十七 お茶	六十八 幸馬齋	六十九 新借儀の 馬野露
七十 お茶	七十一 新借儀の 馬野露	七十二 新借儀の 馬野露
七十三 お茶	七十四 新借儀の 馬野露	七十五 新借儀の 馬野露
七十六 お茶	七十七 新借儀の 馬野露	七十八 新借儀の 馬野露
七十九 お茶	八十 新借儀の 馬野露	八十一 新借儀の 馬野露
八十二 お茶	八十三 新借儀の 馬野露	八十四 新借儀の 馬野露
八十五 お茶	八十六 新借儀の 馬野露	八十七 新借儀の 馬野露
八十八 お茶	八十九 新借儀の 馬野露	九十 新借儀の 馬野露
九十一 お茶	九十二 新借儀の 馬野露	九十三 新借儀の 馬野露
九十四 お茶	九十五 新借儀の 馬野露	九十六 新借儀の 馬野露
九十七 お茶	九十八 新借儀の 馬野露	九十九 新借儀の 馬野露
百 お茶	百一 新借儀の 馬野露	百二 新借儀の 馬野露

もしこれが斯うなる筈に出来た分相應かと思へば、我ながら聊か心細くなりますよ、
かはいさうに、まだ行末のある人間だもの」

もはや二十錢の外に取れない奴と思へば、朝鮮髯、そのまゝ音もなし、

うき世の落武者、この八軒長屋へ流れ込む奴は、いづれ生死の境目に狼狽へ廻りし身の果、もはや満足に其日くの一升米を買ひ出す力もなく、ひよろくとして来るかと思ひの外、かの星影先生が古巢へ兩肩を山の如く怒らして悠々たる風采態度、のそりと住み込み来りし大男あり、

みれば三十前後の大兵肥満、五分刈の頭に鍔廣の中折帽子を戴いて、その下より顔色まツ黒の天眼、球羽織も着物も同じ紬の綿入に、さのみ色も變らぬ白縮緬の兵兒帯を寛く纏ひ、新らしき紺足袋に桐の俎板下駄、一番形の大靴に銀の太き握り手を付けしステッキ、聊か古びたれど大の白毛布三枚に空氣枕、ごろ書生の落ち込みし體にもあらず、破れ壯士の身を忍ぶ體にもあらず、いづれにせよ八軒長屋の一蓮托生には目立

ちて不似合の人物なり、

加之も言葉は案外の優しさ、人に對うて一點さらに態とらしき風情もなく、その恐ろしき大眼に一種の愛敬を浮べ、その固く結べる一文字の口より軽く笑うて、まづ壁一重の隣屋は例の熊さんが許へ歩を運びつゝ、初對面の挨拶、

「始めて御目にかゝりますが、大浦卓三といふもんですよ、どうかね以後は萬事お心易く願ひたい、往來の雑踏に面した市中の住居と違つて何となく愉快だ、面白い、この外に出入のない一方口だから定めて皆さん親類同様でせうよ、ねエ、は、は、は、しかし、かういふ親類が不意に飛び込んで來ては、どうせ御厄介だ、や、御厄介の皮切として伺ひたいが、お仲間入の印を、どういふ工合にすれば宜いでせう、やはり蕎麥ですかね、併し他の振合に過ぎても、足らなくつても失禮だ、御面倒ながら其邊を指圖して下さらないか、何、旦那、そりやア不可ない、それでは困る、

今いふ通り大浦卓三といふもんですよ、覺えて居て下さい、は、は、は、大浦卓三さ、

は、は、は、

この男この長屋には過ぎたる風采言語、いかなる浮世の仔細に追はれて斯くは落ち込み來りしか、どうしても九尺一間の破れ疊三枚に寝るべき者でなし、

あればあるもの、來れば來るもの、大浦卓三が星影先生の古巢へ住み込みしより二日目の朝、お虎婆と壁一重の隣屋、例の廂髪が立去りし古巢へも一人、また流れ込みし奴あり、

されど此奴は八軒長屋に分相應、いかにも不思議のない人品骨柄、この寒中に女物を仕立て直せし古給一枚の上より小兒縞の綿入ちやんく、はや人間の色艶は褪め果てて青白き顔の肉は落ちたれど、あくまで貧乏馴れて今更ら驚かぬ體、きよろくと油

断なき目色を光らしつゝ、何を包みしか脊負ひし大風呂敷を抛け込むや否、尻ひツからけし空脛に草鞋穿のまゝ、小さき紙袋を幾個か手に握ッて長屋中を片ツ端より一列の總挨拶、

「へい、どうか宜しく、七味唐辛子の喜助といふもんですが、本人は至ッて甘く出来た野郎で、はゝゝゝお蕎麥のところは勝手ながら商賣物の薬味だけで堪忍を願ひますよ、甚だ少々づつですが時節柄この通りの始末でね、はゝゝゝ」
もはや八軒長屋に一軒の空屋もなく、それゝの運命もろとも住み込みぬ、いづれ浮世の帯に掃き寄せられし芥溜なれど、まづ人間は暫時そのまゝに置いて、さツと筆端の一掃除に衛生上のため、長屋の隅々に積りし塵だけを掃き出しぬ、

そもくこの業平町に豚小屋かと思はれし八軒長屋の安普請やうく叩き大工の手を放るゝや否、まツ先に流れ込んで以來こゝに一蓮托生の先達とも稱すべきは彼お虎婆また入らざる無用の歳を重ねて今年は六十六の春、近き隅田川の土手に枯木の花は



咲けど、おのれは芽も吹き出さぬ身を何のために生き伸びるやら、加之も猶更ら無事息災に娑婆を塞いで、いよく業突張に抜け残る亂杭の齒を剥き出しながら、石地藏の胸倉へも武者振り付く慾の皮面、されど百までは生きられぬ定命、いづれ苦駄張るべき此お虎婆の最後が見物なり、

身に白銅一枚を取って置く力もなくて、口に十千萬圓を癩癩病の泡に等しく吹き出す奴は西川要五郎、あけても暮れても西の空のみ打ち眺めて、九州の金山が今にも飛んで来るかと足る爪立てながら、さて此奴も今年は三十六の春、いよく年と共に新なる一陽來福といへども、實は貧乏神にさへ見放されて取付かぬほどの男に何が舞ひ込むやら、

その壁一重には相も變らぬ千三屋の石作、お虎婆に次いで今年五十七になりし長屋中の老爺なれど、三歳兒の寢言よりも覺束ない家庫、地面の彼是に年が年中を駈け歩いて、半日も家に居れば其間に折角の運を取外すかと立騒ぐ因果もの、加之も吹き出す泡は隣屋の糞糞野郎に劣らず、現在の九尺一間さへ持ち切れぬ身に本所の奥の二萬坪とは、此奴の行末も面白し、

同じ貧乏の底に落ち込みながら、飢ゑても凍えても例の熊公は例に依って件の如く出来たる天晴れ男の熊さんなり、これに連添ふ鼻アお菊また同じ食ふや食はずに居ても泥溝板を跳ね返す不貞腐れの山の神とは違うて、一點どこやらに優し味のある世話女房、良人は四十二の厄年あけて妻は三十七の春、まして當世の學者が目を剥いて探し廻る清き愛も尊き情も鏝一文に賣り付けぬ夫婦圓滿、その貴重の寶を長屋の奥の襪

襖布子に包んで知らぬ顔に濟まし込むところ猶更ら有難し、

何事にも第一番に驚いて狼狽へ出す八軒長屋の名物は、八卦よい屋の朝鮮髯、十年以來の夜なく、淺草に神易の弓張提灯を照らして算木筮竹を捻くり廻せど、いまだ曾て懷中に一圓紙幣の納まりし事なく自前酒の一升にも有付かぬ幸運齋、もはや人生五十の通り相場に二年を餘せるのみ、たとひ乾坤が顛倒するとも、あはれ再び出直して這ひ出すべき穴も道も塞がりつゝ、只これ漂浪漂浪として飢饉年の割間に等しく、瘦せこけて無用の愛敬あるだけが此奴の藝なり、されど朝鮮髯、みづから自己の骨相を觀て曰く、乃公は死際の三日に生涯の運を搔き集めて萬人に羨まるゝ筈ぢやと、兎も角この八軒長屋で息を引取らぬ覺悟が殊勝なり、

壁越の心中狂言に持前の馬脚を現はして、長屋中に謝罪證文一札を取られながら、まだ目の覺めぬ色狂者、握れば出来る筈と師匠の女房に手を出して長煙管の極印を打たれながら、恥を恥と思はねば更に懲りもせぬ花野露雄、もはや面倒なりとて其後は一人の相手を定めず、いよく世間一體の女に對うての戀病、闇に打ち出す鐵砲玉の如く誰にか煩ひ中て、やらうとの一心より、なま白き顔に青味を帯びて目の色まで血走りし此難物が、蹂躪られし野邊の下草さへ萌え出る自然の春に逢うての振舞いかで鼻持のなるべきや、凡そ世の中に身の程を知らぬ無分別者と借りた金の利ほど怖ろしきものなしとは、さても此奴の事なり、

人に遠く神に近く百代の後までも傳へらるゝかと思ひの外、あはれ一片の新體詩も現在の人間に唄はれず、淺草町の木賃宿に首吊往生を遂げし星影先生の古巢へ、近來

あらたに住み込みし大浦卓三といふ大兵肥満の三十男、そもく、いかなる浮世の割れ目より流れ來りし落武者やら、この八軒長屋に不相應の人體いよ、訝かしく、九尺一間の破疊三枚を再び打ッて出づべき神算鬼謀の足溜とせしか、但しは身を忍ぶ隠れ家に世上の毀譽褒貶を避けんとてか、もしや影を慕うて追ひ來る敵を防ぐに屈竟の場所と見込んでか、まづ暫時は天機こゝに漏らすべからざる奴なり、

大浦卓三に何の因縁なけれど、星影先生に神聖の戀の贖物を切賣せし例の瀬田とよ子おほうらたくさうが古巢へ、その翌日いづこよりか流れ込みしは七味唐辛子の喜助とて、見るから此奴は貧乏馴れし四十男、蕎麥の代りに商賣物の薬味だけを配り歩きし體、いかにも素早く、瘦せこけし面相は朝鮮髻に似て萬事の立振舞に氣輕の調子は石作に似たれど、ぎよろりと底光りの目色に何とやら油斷なき一種の凄味を帯びて、なかく千三屋と八

卦よい屋の類にあらず、うかくすれば此長屋より案外の一物を産み出すべき奴、人知れぬ心の底に七味の上の辛い味を持つた奴なり、

人間は其まゝながら年と共に多少また新なる運命に出喰はすべき以上の六人へ、正體の分らぬ大浦卓三と素性の知れぬ七味唐辛子の喜助と二人の新來を加へて、もはや一戸の空巢もない八軒長屋さらに此上いかなる浮世の風に吹かれて幾度の新陳代謝あるべきか、ついでに其後の行方を暗ませし例の廂髮二女と三人の破戸書生、あのまゝ捨て、置かれぬ奴等、あくまで追窮して必ず引ッ捕へ來るべし、

浪六全集 (第十編) 終

集全六部

大正十五年二月廿日發行
大正十五年二月廿日印刷



發賣所

東京市日本橋區
本石町三丁目
東京市日本橋區
住吉町二番地
東京市本鄉區
本富士町二番地

電話 大手一三三六番
振替口座東京一七四四番
電話 浪花一四九番
振替口座東京一六三六番
電話 小石川七五〇三番
振替口座東京一六九四番

至誠堂書店
至誠堂第一分店
至誠堂第二分店

著者 八軒長屋
村 上
發行者 東京市日本橋區本石町三丁目十四番地
加島 虎吉
印刷者 東京市小石川區久堅町百八番地
村上 新輔

定價金貳圓

印刷所 株式會社博文館印刷所

浪六全集

縮刷

浪六先生の傑作
興味の津々々々

新式ポイント組
袖珍箱入美本
各册金二圓
(郵税十銭)

- 第一編 ■ 當世五人男
- 第二編 ■ 黒田健次
- 第三編 ■ 上田力
- 第四編 ■ 倉橋幸藏
- 第五編 ■ 川上三吉
- 第六編 ■ 吉田雄藏・花車
- 第七編 ■ 品さだめ
- 第九編 ■ 人間學
- 第十編 ■ 八軒長屋
- 第十一編 ■ 八軒長屋後篇
- 第十二編 ■ 八軒長屋續篇

550

57

終

